

## ○135 句目「旅思排雲雁」の「雁」にこめられている故事の考察

『藝文類聚』の「雁」の項に載せられている次の『史記』の一文にある蘇武の有名な故事を、この語に響かせている。

史記曰、蘇武在匈奴中、昭帝遣使通和、武思婦、乃夜見漢使、教使謂單于曰、天子射上林中、得雁、足有係帛書、言武等在其澤中、使者如其言、單于大驚、乃使武還。

『漢詩の事典』ではここを「前漢の武帝の時、中国の北方に強勢を誇っていた遊牧民族匈奴に、外交使節として、蘇武が遣わされた。しかし彼は抑留されて、北海（バイカル湖）のほとりに羊を飼う生活を、十九年の長きに渡って続けることになった。その後、武帝を継いだ昭帝のとき、匈奴に対して、蘇武の身柄の引渡しを要求した。匈奴は、蘇武がすでに死去したと称して、交渉に応じようとはしなかった。蘇武と一緒に匈奴に使いしてそのまま彼の地に留め置かれていた使節の一人に常恵がいた。彼はこのとき、漢の使節の一つの妙案を授けた。すなわち、昭帝が上林（長安の西にあった天子の狩場）で雁を射落としたところ、その足に蘇武の認めた帛書（絹に書いた手紙）が結ばれていて、彼の存命が判明した、というものであった。ことを告げられたとき、匈奴はもはや言い逃れはできないと観念して、やむなく蘇武を漢に帰したと伝えられる。ことの真偽はともかくとして、雁が南北に渡る習性を巧みに利用した説話であることは確かである。手紙のことを「雁書」「雁信」というのはこの故事に由来している。」と説明する。

（荒川 美枝子）